

## 論文内容要旨

しめい 氏名	すがわら あ き こ 菅 原 亜 紀 子
学位論文題名	Characteristics and gender differences in medical interview skills of Japanese medical students (医学生の医療コミュニケーションスキルの特徴と性差) :
<p>【目的】医療コミュニケーションスキルは医師にとって重要なスキルのひとつである。しかしながら、欧米に比べて本邦の医学生は模擬患者 (Simulated Patient, SP) 参加型教育を受ける機会が少なく、コミュニケーションスキルの特徴も明らかではなかった。本邦の医学生のコミュニケーションスキルの特徴と性差を明らかにするため、SP との医療面接実習における医学生のパフォーマンスを評価した。</p> <p>【方法】2012～2014 年度に福島県立医科大学の医療面接実習に参加した医学部 5 年生 293 名のうち、同意を得た 279 名を対象とした。医学生は 4 つの医療面接課題のうち 1 つを担当し、SP と医療面接を行なった。実習を担当した 3、4 名の教員が医学生のパフォーマンスを観察し、パフォーマンス全体を 10 段階で評価した。さらに、医療コミュニケーションの基本スキル 9 項目 (1.あいさつ・自己紹介・患者確認、2.適切な視線・態度、3.質問方法の使い分け、4.うなずき・相づち、5.共感の言葉、6.専門用語を避けたわかりやすい言葉遣い、7.適切な医学的情報の伝達、8.心理社会的情報の収集、9.面接の順序立て・流れ) について 4 段階で評価した。医学生は、実習後に教員と同一の評価方法で自身のパフォーマンスを評価した。また、SP は患者の視点から、医学生のパフォーマンス全体と 4 項目 (1.態度・マナー、2.身だしなみ、3.わかりやすい言葉遣い、4.患者の話への傾聴) について評価した。男子学生と女子学生のパフォーマンス評価の差、教員評価と学生自己評価の相関・差を統計学的検定により検討した。</p> <p>【結果】全ての項目で教員評価と学生自己評価の間に有意な相関を認めたが、基本スキル 1 項目を除く全てで、医学生は自身のパフォーマンスを教員よりも有意に低く評価した。女子学生は、教員評価において「適切な視線・姿勢・態度」「うなずき・相づち」「共感の言葉」「心理社会的情報の収集」の 4 項目で男子学生よりも有意に高く評価された。しかしながら、女子学生自身が男子学生よりも有意に高い自己評価をしたのは、「心理社会的情報の収集」のみであった。一方、男子学生は、教員評価で女子学生よりも高く評価された項目はなかったが、「適切な医学的情報の伝達」と「面接の順序立て・流れ」の 2 項目で女子学生よりも有意に高い自己評価をしていた。SP による評価には、男子学生と女子学生の間に有意な差を認めなかった。</p> <p>【結論】本邦の医学生の医療コミュニケーションスキルに有意な性差を認め、コミュニケーション学習の準備状況や特性に性差が存在する可能性が示唆された。医学教育改革が進む昨今、継続的に医学生のコミュニケーションスキルの特徴を観察していくことが重要と考える。</p>	

※日本語で記載すること。1200字以内にまとめること。

# 学位論文審査結果報告書

平成 26 年 1 月 23 日

大学院医学研究科様

下記のとおり学位論文の審査を終了したので報告いたします。

## 審査結果要旨

氏名 菅原 亜紀子

学位論文題名 **Characteristics and gender differences in the medical interview skills of Japanese students**  
(医学生の医療コミュニケーションスキルの特性と性差)

本研究は、我が国の医学生におけるコミュニケーションスキルの特性と性差を明らかにすることを目的とし、模擬患者との医療面接実習での医学生のパフォーマンスを評価したものである。対象は、本学の医学部 5 年生 279 名（2012～2014 年）である。医学生が模擬患者と医療面接を実施し、3、4 人の教員と模擬患者が医学生のパフォーマンスを 10 段階、医療コミュニケーション基本スキルを 4 段階で評価した。結果、医学生自身の評価は教員よりも有意に低く評価をしていること、女子学生は「適切な視線・姿勢・態度」「うなづき・相づち」「共感の言葉」「心理社会的情報の収集」で男子学生より有意に高く評価されたことが明らかとなった。審査会において、医学生の出身地や成績による影響（それらを考慮した多変量解析の可能性）、教員間の評価基準の妥当性、模擬患者による評価において性差が認められなかったこと、得られた結果の医学教育への応用に関する質問がなされ、出身地や成績については検討していないこと、教員間において評価法の共通認識がなされていたこと、模擬患者では性別に対する先入観が存在したことがその理由として考えられることが述べられた。

本研究成果において、医学生の医療コミュニケーションスキルに有意な性差が認められたことは、非常に興味深い結果であり、本研究は、今後の医学教育の方策に貴重な検討内容と判断され、学位に値する。

論文審査委員 主査 大平弘正  
副査 後藤あや  
副査 亀岡弥生